

提供している。結論はなく視聴者に問題をなげかけているだけのところが多く、視聴者を惹きつけ続けている理由ではあるまいか。

ドラマを学術の対象として取り上げることはメディア学としても難しいことであるが、このドラマについては1996年 *New England Journal of Medicine* (Vol. 334 No. 24) に *Cardiopulmonary Resuscitation on Television — Miracles and Misinformation* として取り上げた論文が載った。それによれば「ER」を含む医療ドラマの中のCPR(心肺蘇生術)は成功率が高すぎ、医療の知識をドラマから得る視聴者にCPRに対する、過大な期待を持たせることが問題だとしている。医療者にはドラマであっても医療の現実を正確に描かせるようにする努力が必要であるとしているが、この論文からその後多くの議論が起こった。また1998年 *Journal of American Medical Association* (Vol. 280 No. 2) は *The Role of the Television Drama ER in Medical Student Life: Entertainment or Socialization* という論説を載せている。医学生が熱中し、教科書からよりも多くのことを学んでいるというドラマと、臨床の現場で学ぶ現実のねじれに対して、学生はどのように職業としての医療人の社会性を身につけてゆくかを論じている。テレビドラマというものの持つメディアとしての大きさと医療そのものの持つ複雑性に対する内省とも読める興味深く難しい論説である。

テレビドラマがこのような形で医学界に取り上げられることは稀有なことに思われる。現

実のアメリカ医療は世界で最も高い医療費を費やし、国民の15%を超える医療保険の無保険者を抱える国である。ERは保険の有無に関係なしに初期治療を提供している。そのコストを病院はコストシフトとして保険請求の中に潜り込ませているという。

高度の医療を持つ豊かなアメリカに国外から患者がやってくることはめずらしいことではなく、ERの初期治療を受ける目的の貧しい国外からの入国者もいるとされている。医療にかかわるスタッフの出自もまた多様である。しかし、人・物・金がアメリカに集まってきていた時代に始まったドラマは、今、少しく変化してきているように感じられる。アメリカはじめ先進諸国の医療費の高さは、*Medical Tourism*(医療旅行)として、安く高度な医療を廉価で提供する国に、賢い患者を流失させてきつつあるという。アメリカの懐の深さは、多くの若者をひきつけると共に、厳しい医学教育により育てた先端医療を担う多くの医療者を世界中に送り出してきた。世界が一体化する中で、文化的な壁を容易に越える技術は世界中に広がるであろう。それと共に、広がる格差は、被医療者としての患者の輸出入をもたらし始めていくという話にはうなずけるものがある。ドラマERの描くアメリカの医療現場のエピソードは事実であるものが多いといわれるが13年間にわたるドラマを通観しての、監修者としての現在の感想はそのようなものである。

(平成20年3月例会)

新刊の医家肖像集 (杏雨書屋)

天野陽介, 町泉寿郎, 小曾戸洋

2008年6月、武田科学振興財団杏雨書屋は『杏雨書屋所蔵医家肖像集』を刊行した。この書は杏雨書屋開設30周年の記念事業の一つとして発刊されたものである。

これまで、日本の歴代名医の肖像を集めた書に

は藤浪剛一(日本医史学会第4代理事長)の『医家先哲肖像集』(昭和11年・刀江書院)があり、同書には165点の画像が収録されている。従来唯一のまとまった日本医家の肖像集で、医家肖像を引用する上で長く重用されてきた。

藤浪は同書の序文において「伝記と肖像とは車の両輪の如くである。両者相待ちて、始めてその人物を躍動せしめ、その風格を思慕せしむるに足るのである」と述べ、医史学研究における肖像画の重要性を説いている。医家肖像の蒐集に努めた藤浪は、その成果を集成し『医家先哲肖像集』を刊行した。藤浪に先行して呉秀三（日本医史学会初代理事長）、富士川游（同学会第3代理事長）もまたさかんに先哲医家の肖像を蒐集し研究を行っている。

新刊の『杏雨書屋所蔵医家肖像集』には、杏雨書屋に所蔵される169名、201点の医家肖像がカラー印刷で影印収録されている。うち177点が藤浪剛一の旧蔵品で、昭和19年杏雨書屋に入架した。その多くを占める模写品は、藤浪が肖像画を蒐集する際に原画の入手が不可能なため専門画家に模写させたものである。他に武田長兵衛氏杏雨書屋旧蔵（2点）、武田薬品工業株式会社研究所旧蔵（5点）、佐伯理一郎旧蔵（3点）、藤田吉王旧蔵（7点）、坂本恒雄旧蔵（1点）、杉立義一旧蔵（6点）が収録されている。

本書の編集にあたっては、肖像画を掲載した医

家の伝記に加え、肖像画についての参考項目を設け、当該肖像画に関するの編者らの知見を述べた。参考項目には〔揮毫年、原画・模写の区別等〕〔他所の存在等〕〔賛文・落款等〕〔参考文献〕〔医家先哲肖像集〕などの各項目がある。

このうち、〔揮毫年、原画・模写の区別等〕〔他所の存在等〕の項では、原画、模写で原画が子孫に伝存するもの、模写で原画が他家に伝存するもの、模写で原画が亡失または行方不明のもの、木像（人形）により画像が作成されたもの、書物から作成されたもの、もとは写真に由来するもの、などの区別や、他の所蔵先を記した。〔賛文・落款等〕の項では、肖像画に付されている賛文の翻字・訓読・語句の注、落款の翻字などを記した。〔参考文献〕の項では当該肖像画に関する参考文献を挙げた。当該画像が藤浪『医家先哲肖像集』に収録されている場合には〔医家先哲肖像集〕の項にその該当番号を記した。

本書が今後の医家肖像の資料として活用され、当該分野の調査研究がさらに進展することを期待したい。

（平成20年5月例会）

方伎雑誌の訳注研究

寺澤 捷年

『方伎雑誌』は幕末の名医・尾台榕堂（1799-1870）最晩年の著作で1871年に刊行されたものである。本研究で用いた底本は近世漢方医学書集成『尾台榕堂』（名著出版）に影印版で収録されている『方伎雑誌』であり、底本に於いて一文字頭出して記されている事項を順次「節」とした。

その内容は症例、医論、生薬の選品など多岐に亘るが、榕堂の学識は誠に深く、「古人曰く」として引用されている言葉の出典、また用いた丸散方、軟膏類の記述も今日の我々には理解出来ない。

そこで、『欽定四庫全書 電子版』（香港）、呉秀三・富士川 游の選集校訂『東洞全集』、松本

一男の『訓注・榕堂井観医言』などの著作を検索し、全ての不明箇所を明らかにした。北里研究所東洋医学総合研究所の小曾戸 洋氏にも多大な助力を得た。本研究は先人の偉大な業績なくしては為し得なかった。

榕堂の引用した文献は『春秋左氏伝』『論語』『中庸』『大学』『史記』『漢書』など多岐にわたるが、本研究ではその全ての出典と引用箇所を明らかにした。

最後まで残った不明箇所は開港によって横浜に渡来するようになった生薬・大黃の産地「大仏加里」であったが、これは『蛮語箋』（1848）によ